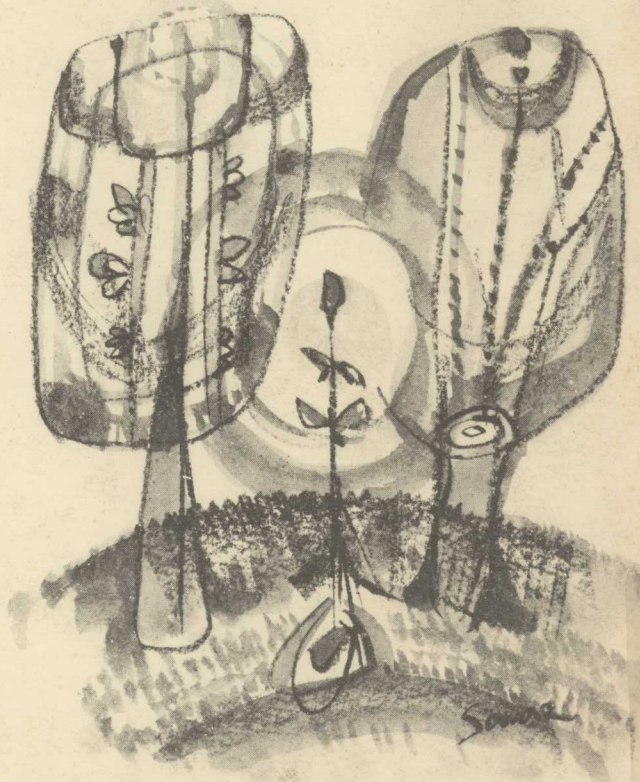


近代女流の文学

村松定孝
松村緑
田中保隆
新間進一
熊坂敦子
岡保生
板垣弘子



新
典
社

近代女流の文学

板垣弘子
岡保生
熊坂敦子
新聞進一
田中保隆
松村緑
村松定孝

新典社

近代女流の文学

* 著者略歴 *

板垣弘子

昭和10年3月10日，大阪生。立教大学卒業。現在実践女子短期大学講師。主著『与謝野晶子』(昭43，清水書院)『近代日本女性史・文学』(鹿島研究所出版会，近刊)

岡 保生

大正12年3月31日，三重生。早稲田大学卒業。現在昭和女子大学教授。『尾崎紅葉の生涯と文学』(昭43，明治書院)『小栗風葉』(昭46，桜楓社)

熊坂敦子

昭和2年3月24日，兵庫生。早稲田大学卒業。現在日本女子大学教授。主著『夏目漱石研究』(昭33，新潮社)『明治文学全集』75 (昭43，筑摩書房)

新聞進一

大正6年9月3日，東京生。東京大学卒業。現在青山学院大学教授。主著『歌謡史の研究—その1，今様考』(昭22，至文堂)『近代短歌史論』(昭44，有精堂)

田中保隆

明治44年1月24日，岡生。東京大学卒業。現在聖心女子大学教授。主著『夏目漱石』(昭44，明治書院)『近代評論集Ⅱ』(大正期)篇(昭47，角川書店)

松村 緑

明治42年1月4日，岡生。東北大学卒業。東京女子大学名誉教授。主著『薄田泣菫』(昭32，角川書店)『石上露子集』(昭34，中央公論社)『浦原有明論考』(昭40，明治書院)昭和53年1月18日没

村松定孝

大正7年6月17日，山梨生。早稲田大学卒業。現在上智大学教授。主著『近代日本文学の系譜』(昭31，社会思想社)『泉鏡花』(昭41，葦栗書房)『評伝樋口一葉』(昭34，実業之日本社)

(五十音順)

昭和47年4月1日初版発行

昭和56年4月1日6版発行

検印省略

編 著 者 板垣弘子・岡保生・熊坂敦子・新聞進一

田中保隆・松村緑・村松定孝

発 行 者 松 本 輝 茂



発 行 所 株式会社 新 典 社

〒101 東京都千代田区西神田 3-5-6

振替東京 26932 電話(03)265-3863

印 刷 所 有限会社 萬 友 社

3164 ISBN4-7879-0606-2 C1091

近代女流の文学

目次

近代文学に現われた女性像

小説

近代女流小説の流れ

明治・大正期

- 一 目覚めまで
- 二 われは女なりけるものを
- 三 閨秀小説の時代
- 四 小鳥も飛び立つ

昭和期

- 一 新時代の文学
- 二 放浪期
- 三 くれないの糸
- 四 歌声よ、おこれ
- 五 才女時代

作品鑑賞

蕨の鷺
小公子
たけくらべ

三宅花圃
若松子
樋口一葉

元 七 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

詩歌

木乃伊の口紅
伸 子
真 知 子
放 浪 記
老 妓 抄
くれなゐ
なまみこ物語

田 村 俊 子
宮 本 百 合 子
野 上 弥 生 子
林 芙 美 子
岡 本 か の 子
佐 多 稻 子
円 地 文 子

近代女流詩歌の流れ

短歌

- 一 旧派の歌壇について
 - 二 明星派を中心に
 - 三 心の花その他諸派
 - 四 アララギ派とその周辺
 - 五 戦中・戦後の歌壇をめぐって
- 俳句・詩
- 一 新体の詩と伝統的詩形
 - 二 女流漢詩人の系譜
 - 三 俳壇への女流進出
 - 四 近代詩から現代詩へ

——女流詩人の登場——

三〇
三一
三二
三三
三四
三五
一四
一五
一六
一七
一八

△詩▽

マンフレット一節

お百度詣

君死にたまふことなかれ

小板橋

ひとりお美しいお富士さん

大いなる樹木

小金井喜美子 二五

大塚楠緒子 二六

与謝野晶子 二七

石上露子 二八

深尾須磨子 二九

永瀬清子 三〇

日記・随筆・評論

近代女流日記・随筆・評論の流れ

一日記

二随筆

三評論

一五

一六

一七

作品鑑賞

こゝちよき

みづの上

人及び女として 自序

マダム貞奴

元始女性は太陽であつた

他 愛

晩年の父

中島湘烟 二〇三

樋口一葉 二〇四

与謝野晶子 二〇五

長谷川時雨 二〇六

平塚らいてう 二〇七

岡本かの子 二〇八

小堀杏奴 二〇九

柳は風の吹くままに
婦人と文学
菅野の記
私の見なかった人
焼 栗

付 録

近代女流文学史年表

参考文献

あとがき

森田たま 三三
宮本百合子 三五
幸田文 三六
吉屋信子 三三
網野菊 三三

三三

三三

三三

總
說

近代文学に現われた女性像

近代文学に現われた女性像

一

いま、ここに明治・大正・昭和三代にわたる近代文学に現われた女性像について論ずるにさきだち、明確にしておかねばならぬ事柄は、近代文学における新しき人間像の提示をどこに置くかという点である。すなわち、近代文学の中の女性をとりあげるにしても、まず、近代人そのものがどのように描かれたか、という問題から始めるべきであろう。なぜならば、近代文学は、近代的人間像の創造と設定を作者がこころがける姿勢なしには、その成立を論ずることは不可能であるからである。

しからば、近代文学とは、つねに近代的人間像を描くことに終始した文学でなければならぬのであろうか。そうでなければ、近代文学と称する資格を持たないのであろうか。

私は、かならずしもそうとは考えない。

また、しかし、およそ近代文学の作者にして、近代的自覚と近代的人間観の所有者にあらざるときは、彼が近代文学の作者たるの資格を持ちえないことは自明の事実である。そして、もしそうだとすれば、近代文学の作中人物にして、前近代的であったり、非近代的であるにしても、それを描くところの作者の視点は、あくまで近代的自我に目ざめたそれであらなければならないはずであろう。そのことを本論に通わせて考えるならば、近代文学成

立の時点で、近代作家が、はたして近代女性を描きえていたかどうかの問題に帰着する。また、たとえ描こうにも、未だ男性の近代化に比して、女性のそれがたち遅れているため、素材的に近代女性の提出が不可能に近かったにせよ、近代文学成立に参加した作者たちは、女性の解放への協力を惜しまなかったか否か。その問題が、まず明らかにされねばならないであろう。

文学は時代を反映するものであり、文学者とは時代の子であるといわれる。だとするならば、時代が作者を作り、作品を生むものと考えても過言ではない。新しき女性像の創造が、ゆきなやみの状態をしばらく続けたとしたならば、そのような状態を続けさせた時代性というものも、考慮に入れておかなければなるまい。

では一体、近代文学を成立せしめた、近代的自覚に立つ日本の近代作家たちは、どのような方法で、その美挙を可能にさせ、同時に、肝心なものを捨象したか。そして、そのことは彼らが女性を描く上にどのような結果をもたらしているだろうか。私のいわんとしているところを端的に申すなら、日本の近代作家たちは、自己の化身ともいうべき作中の男性に近代的苦悩を代表させながら、——それは日本の近代化の政治・社会・精神面での不毛への憤りや絶望という形で行なわれているのだが——かくあるべき近代女性の理想像の創造には、きわめて消極的であったり、ほとんど、等閑視した観があることを、われわれは改めていなめない事実として認めざるをえないということなのである。以下、この事実について、しばらく筆を進めてみることにしたい。

近代日本文学の成立を、個人の権威と自我の自覚に立った文学者の、国家・社会の問題の忌避に発するものとみる瀬沼茂樹氏は、菊亭香水の立志小説「惨風悲雨世路日記」(明治一七)にふれ、「明治の青年の政治的理想を托するものがそこにはあったが、まだ文学的人間像を結晶するまでにいたっていなかった」ことを指摘し、「二葉亭

四迷・森鷗外が出て、ゆくりなくも、内海文三・太田豊太郎というような人間像が提供せられるにいたったことはおもしろい」と述べている。瀬沼氏が「おもしろい」と説くゆえんは、内海や太田は、作者によって国家有用な人物として読者に示されるかわりに、それへの挫折や、そうなるための内面の苦悩を描こうとしている点への注目にあるように思われる。すなわち、瀬沼氏は「浮雲」（明治二〇～二二）や「舞姫」（明治二三）には、自我の自覚に生きようとすれば、社会機構からはじき出されるか、出世を捨てねばならなかった日本の知識青年の悲劇が、写実的ないしは浪漫的に提出されたことに着目し、右二作に共通した特色を見いだしているのである。

この瀬沼氏の見解に、私は何らの異論をさしはさもうとするものではない。が、もしも明治の青年が個人の権利と自我の自覚に即して人間解放を行なうことを理想としたとすれば、その意識は彼らが愛人や配偶者を選ぶ場合にも適用されるべきではなかったか、彼らの意識が文学的人間像として結晶してゆく過程で、なにゆえに女性の近代化の形象が忘れられていたのか、そこに疑問が残るのである。たとえ国家有用な人物と背馳する位置に自己をおくにせよ、それがために女性の近代的自覚をうながす方向への努力をも併せて捨て去る必要はなかったはずである。

しかるに、伊藤整のいう「逃亡奴隷」の集団が文壇という特有な自由社会を形成した時にも、日本の近代文学者のあいだには、解放された女性の積極的支持を自作に反映させることなく、ましてや人生の伴侶たるべき妻を描く場合にも、男女の平等にうらづけられた自覚は見いだされはしなかった。そこに私は、ほとんどの近代作家の女性観の限界を思わざるをえない。そして、この事實は、彼らの思考した人間解放が女性解放を前提としない偏頗なそれであり、彼らの生活感覚が、所詮は前近代的因習から脱却しきっていなかった事情を、自ら如実に語っていることになるであらう。

皮肉なことには、瀬沼氏をして、いみじくも文学的人間像成立の以前とされているいわゆる政治小説期の作品に、むしろ女性の解放が叫ばれかけていることである。たとえば東海散士（柴四朗）の「佳人之奇遇」（明治一八～三〇）に登場するスペインの革命家の娘・幽蘭、アイルランドの独立を企てた政客を父とする紅蓮の二女性は、日本の自主独立を説いて主人公散士を上げます女丈夫であり、末広鉄腸の『雪中梅』（明治一九）のお春は、青年志士の思想に共鳴し主人公の国野基と交際を結び、須藤南翠の『新粧之佳人』（明治二〇）の千代は、改進黨の水本の活動を応援し合意の結婚を遂げる。いずれも女性解放の示唆が作品に横溢している。「佳人之奇遇」の場合は、異国の乙女たちであるが、散士の胸中に日本の女性も、かく目醒めよのねがいがあればこそあの構想も成立したものと見える。また、悲惨小説の作家として「変目伝」（明治二八）や「黒蜥蜴」（同）で、クローズアップする広津柳浪も、明治二〇年に「女子参政 蜃中楼」を『東京絵入新聞』に連載し、女権の強調をこころみている。しかし、柳浪の場合、そうした作意は政治小説をパターンとして時宜に投ずるに止まって、彼自身が女性解放の推進を自己の生活意識の中で抱いていたかどうかは、その後の作品に照らして疑わしい。ただか「黒蜥蜴」のお都賀に、舅の淫乱を罰するため毒殺させている程度である。ちなみに、当時、女性自身の手によって書かれた中島湘烟の『善悪の岐』^{ちまた}（明治二〇）、三宅花圃の『藪の鶯』（明治二二）、木村曙の「婦女の鑑」（明治二二）は、それをここに細述するいとまはないが、いずれも新時代の女性の在り方を望見するこころみに成功している画期的作品といえる。しかし、それとても新しい家庭建設へ到達する構想に及ばず、したがって、未来の妻の在り方を設定するところまでは描かれなかった。

こうして、家庭婦人の在り方に対する批判は、いっぽうでは「浮雲」や「舞姫」に日本の知識青年の悲劇が提出されながらも、ほとんど等閑視された形で、明治小説の代表作の中で痛ましい状況下に呻吟しつづけることに

なる。自然主義以前の紅葉や一葉の描く妻が、男尊女卑の犠牲下にあるのはともかくとして、近代精神を身につけた独歩・藤村・花袋はもとより、漱石を経て、白樺派の作家に至るまで、ことごとくこの傾向の著しいのはなぜか。家庭と社会とを同一に敵視するが如き態度で、孤立した良人の立場に一種の誇りを感じているのは、彼らの「妻」に対する共通の理念の如きである。

さて、明治二〇年代から三〇年代にかけての代表的風俗小説の作家尾崎紅葉は、新聞小説家という作家的立場やその作風のゆえからも、新しい女性を手がけてはいないが、西鶴調を消化し自在絢爛たる文章として、彼の作中でも傑作の一つに数えられている「三人妻」（明治二五）では、男性の愛欲の奴隷となった女性が三人三様に描き分けられている。金沢の貧農の二男に生まれた葛城余五郎は、天性の利発と豪胆で財をきずき、本妻のほか柳橋の芸妓お才を囲う。が、お才には愛人が他にあつたため、余五郎の寵を失う。次に煎餅屋の娘から紳商の女中となり、自ら進んで余五郎の妾となった紅梅は、もう一人の余五郎の妾で、もと琴の師匠をしていたお艶のことを本妻に中傷し、事あらわれて追放される。お艶のみが主婦の妹分として遇され、余五郎が死去してから、一子余之助と共に幸福な境涯に入るといふ筋である。ところで、「三人妻」という表題であるが、本妻のほか三人の妾を囲っていた男の話なのだから、「三人妾」ならわかるが、彼女らを妻と呼ぶのは正当ではない。正当でないことを承知で、わざと三人妻としたところに表題の面白さはあるが、三人の妾にかしづかれ、本妻とも四人の女をたくみにあやつる余五郎を描こうとした紅葉の意図は、奈辺にあつたものか。『新著月刊』（明治三〇・六）の「作家苦心談」によると、本作は、紅葉が「或豪商が死んだ時に三人の妾が髪の毛を切つて棺に入れた」という雑報から思い付いたもので、「各々異なる性質の女がそれぞれ寵を得ている具合を書いたら面白かる

う」と、そういう興味で筆をとる気になったとのことである。とするならば、紅葉にとっての妻という語の概念は、家を整え子孫を育成する主婦の別称とみるよりも、主人につかえ、主人に気に入られることを専一に、これつとめる女奴隷の如きものに他ならなかったのではないか、とさえ考えられてくる。もちろん、「三人妻」の余五郎如き成上がり分限者を、よもや紅葉が男性の理想像としたわけではあるまい。だが、本作から、われわれは余五郎の生活態度を批判的に見る作者の眼を感じないどころか、三人の妾を囲いえた分限者のたくましさ肯定しているかにさえ読みとれるのである。あまつさえ、妾の一人が心がけのよさから本妻の妹分にとりたてられることを、さながら「女大学」の教訓めかして讃えているに至っては、これをひとつの風俗画として鑑賞するには、しのびがたい屈辱感を、おそらく現代の女性の読者は覚えるに違いなかるう。

さらに樋口一葉の「十三夜」（明治二八）に目を転ずると、良人の暴君ぶりに耐えかねて離縁を決意して里へもどってきたお閨を訓戒する父親の言葉は、明治二〇年代の官員の妻の置かれた運命を如実につたえているものといえよう。

一葉は、生涯独身であったので、妻の座に自らを置いた上の実感からこの作品を書いたものではない。だが、それだけに、教養ある妻が良人と対等の権利を主張するような家庭を小説にこころみる自由も、持ちえたはずである。それをあえてしなかったのは彼女の既婚女性へのインヘリオリティコンプレックスと復讐的感情の反映とみるべきか。塩田良平氏は「わかれ道」（明治二九）や「われから」（同）が「女性を人間の立場におき、男性や世俗に対する抵抗を示した不敵な意図を感じさせる作品である」と律している。が、その意図からわれわれは、どれほどの抵抗を読みとれえようか。「わかれ道」のお京は、自らすすんで人の妾になるだけのことだし、「われから」では、人妻のお町が書生の千葉と不義を犯し、結婚に破綻をきたす結末を作者は冷笑しているかに

うけとれよう。要するに、一葉は世の妻たるべきものの宿命をかくあるものと規定し、何らの救いをも与えていないのである。彼女はついに新時代に処する新家庭の構想は抱きえずして終わつたのだつた。ただ、しかし、一葉の日記や彼女の随筆を通して、しのびうることは、一葉自身は当時にあつては、一見識を有する知識人であり、かつその人生觀も、芸術家としてきわめて高潔至純なる詩魂に裏づけられていたことは、認めるべきであらう。たとえば、彼女の書き残した文反古の一節に

われは人の世に痛苦と失望とを慰さめんために生れきつる詩の神の子なり。わが血を盛りし此のふくろの破れざる限り、われはこの美を残すべく、しかして、この世、ほろびざる限り、わが詩は人の生命となりぬべきなり。

とあるのを見ても、その理想のほどが諒察しうるのである。

二

次に、自然主義の作家たちの女性觀はどうであつたか。処女の純潔を論じ、「恋愛は人生の秘鑰ひやくなり、恋愛ありて後、人生あり」と看破した北村透谷を兄事した藤村。宇宙の無窮無辺無限におどろくことによつて、人間のパセティックなものは、宇宙からもどつて来なければならぬと思考した独歩。そして、独歩や藤村の体温を身近に感じながら紅葉の葬儀に際して「いよいよ、われわれの新しい時代がやってきた」と昂奮の涙を催した花袋。これら自然主義文学の代表作家と称せられる人たちの文学精神が、硯友社的な創作態度の否定に根ざしていたことはいうまでもない。彼らは紅葉を「洋装した元祿文学」と嘲り、自己の心奥の苦悩を告白するところに文学生活の眞実を求めた。物語性を排することで、自伝小説に一命を賭けた。伊藤整は「近代日本人の発想」の中